

## 大手 IS 相談会報告

### タイトル

森林の価値とは 一森と生きるひとと社会の未来像―

日時：2022 年 7 月 25 日（木）15 時から 17 時

形態：オンライン

参加者：市川光雄・京都大学名誉教授（生態人類学）

井上真・早稲田大学（森林政策学・環境社会学）

大手信人・プロジェクトリーダー

松田素二・プログラムディレクター

冒頭に資料に基づいて 30 分程度、プロジェクトの目的や位置付けなどの概括的説明があった。森林と人と社会の「隔たり」が顕著になっている現代社会において、「隔たり」を縮め、人々が森林の価値と繋がっていくために、その相互作用環を構築し直すことを目指す。具体的には、生態系サービスの中でも文化的サービスに焦点をあてて森林の価値を現場から捉え直していく重要性が指摘された。これに対して、市川さんからまずプロジェクトの性格と目指す方向について、以下 4 点の注文がなされた。

その前に、全体として何をどのように明らかにしていくのかという具体的でわかりやすい提示があったほうが良いのではという印象を述べた。

- 1 対象となる森林について説明があったほうが良い。森林といっても、原生林から復興造成林、里山の共有森林や鎮守の森など多種多様な森が存在している。このプロジェクトで対象とする森林の範囲は何だろうか、そしてそれはどうしてなのかがわかるようにしてほしい。
- 2 森林と人、社会との関係というとき、その人、社会とはどのようなレベルで想定されているのかの説明が必要。森林域に居住する人々、森林を管理する企業や組合、地方自治体、国あるいは地球市民まで幾重にも設定できる、人と社会のどれを対象とするのだろうか
- 3 調査対象サイトの選定の必然性、とりわけ、日本、フィンランド、インドネシアのような生態系や気候、歴史が異なる地域を比較する意図と意味についての説明は必要だろう。
- 4 森林の文化的サービスを対象とする際、歴史学、哲学・思想、美学、宗教学、精神文化などを対象とするチームをどのように組織するのだろうか。

つづいて、東南アジアの森林調査経験をもとに井上さんから下記 4 点のコメントがなされました。

- 1 ここでいう「隔たり」は環境社会学で嘉田由紀子さんが提示した「近さ・遠さ」の概念に近似している。彼女は人と水の距離を対象にしてこの議論を行なったが、この「隔たり（あるいは遠近感覚）」をもとに、どのような議論を展開するのか、したいのかを明示する必要がある。
- 2 フューチャーデザインの手法を用いることの妥当性や具体的方法について検討する必要がある
- 3 森林との隔たりについて、都市住民と山村住民を二項対立的に想定する必然性はないかもしれない。それについての検討が必要。
- 4 日本、インドネシア、フィンランドの調査サイトの選定と位置付けをわかりやすく提示する必要がある。

以上のコメントや注文に対して、横山さんからも補足的説明があり、率直な意見交換がつづいた。さらに、第二ラウンドとして、何が今このプロジェクトに求められているかについて、市川さんから、隔たりを実証するための具体的で微細な仕掛け（方法）をミクロな現場からどう積み重ねていくのかというベクトルと、森林喪失が地球規模で環境問題として喫緊の課題となっており、その原因の一つとしてある「隔たり」を探究するグローバルでマクロなベクトルをどのように接合するのか、という点により注力してほしいというコメントがあった。井上さんからは、森林の生態系サービスを測定評価する生態学グループと、その文化的サービスを解明する哲学、思想、宗教学、人類学のグループの中間に、森林の経済的価値の変容や国土開発における森林の位置付けを対象とする政策科学、そこに暮らす人々の意識変容と日本社会の構造変化を重ねて考察する社会学者などの社会科学グループを置く必要があること、また「隔たり」をかつてのように「回復」という伝統復古主義ではなく、これからの新しいライフスタイル、生活思想として捉え直す作業の重要性について指摘があった。